

日本学術会議 臨床医学委員会 脳とこころ分科会(第26期・第2回)  
議事録

1. 開催概要

日時: 2026年5月2日(土)12:00~13:15

開催方法: オンライン

出席者: 高橋良輔(委員長)、池田和隆、大江美佐里、岡部繁男、尾崎紀夫、  
加藤忠史(副委員長)、北中淳子、國井泰人、坂田省吾、鈴木匡子、高橋英彦、内匠透、  
花川隆、林朗子、林由起子(幹事)、坂内博子、平山真理、  
古屋敷智之(幹事)、三澤日出巳、三島和夫、水口雅  
(敬称略)

2. 議事概要

2-1. 神経倫理に関する見解案について

脳科学研究およびその臨床応用に関わる倫理的課題について、見解案の検討状況が共有された。神経科学の進展に伴い、研究・医療・社会実装の各段階で生じる倫理的、法的、社会的課題への対応が重要であることが確認された。本見解案については、関連分野からの意見を踏まえ、内容の充実と表現の精査を進めることとなった。特に、人文・社会科学的観点を含めた検討の必要性が共有され、早期の発出に向けて引き続き作業を進めることが確認された。

2-2. 「未来の学術振興構想」の改訂について

脳科学分野における将来構想として、多階層的な脳計測・解析技術、研究機関間ネットワーク、脳関連データ基盤等を活用し、脳とこころの理解を深める研究構想について報告があった。本構想では、脳の情報処理原理の理解を基盤として、人工知能、ブレイン・マシン・インターフェース、脳モデル研究等との接続可能性を含む将来的展開が議論された。今後も、社会的意義や倫理的配慮を踏まえつつ、構想の具体化を進めることが確認された。

2-3. 大型研究計画に関する申請状況について

脳科学分野の大型研究計画に関する申請状況について報告があった。構想では、これまでの脳科学研究で蓄積されたデータや研究基盤を継続的に活用し、脳の情報表現や知性の基盤を理解するための研究拠点形成が目指されている。本件については、関係機関・関連学会等と連携しながら、今後も情報共有を行うことが確認された。

2-4. 公開シンポジウムについて

2026年5月9日(土)に、日本学術会議公開シンポジウム「生物知性と人工知性の融合が生み出す未来」がオンラインで開催されることが報告された。本シンポジウムでは、計算論的神経科学、動物脳研究、脳オルガノイド・培養神経回路等の研究、脳データ基盤などを手がかりに、生物知性と人工知性の融合がもたらす可能性について議論する予定である。関係者への周知と参加呼びかけを行うことが確認された。

2-5. S7 2026 声明および学術フォーラムについて

Gサイエンス学術会議(S7)2026 声明において、「脳の健康、精神的健康を含むブレインヘルスと社会的レジリエンス」が重要なテーマとして取り上げられることが共有された。これに関連して、脳の健康を個人の幸福、社会的包摂、経済的・社会的基盤の維持に関わる重要課題として位置づける必要性が確認された。精神疾患と神経疾患を連続的に捉える視点、AI・データサイエンス・ゲノム・脳画像等を統合した研究基盤、神経倫理および当事者参画の重要性についても議論された。また、2026年10月18日(日)に、日本学術会議主催学術フォーラム「脳の健康(ブレインヘルス)と社会的レジリエンス」の開催が企画されていることが報告された。

2-6. 日本学術会議の制度見直しについて

日本学術会議の法人化に伴う制度見直しの動向について情報共有があった。特に、連携会員制度のあり方、任期、活動実態を踏まえた運用、若手・多様な分野からの参画の重要性などについて説明があった。

#### 2-7. 今後の分科会活動について

脳とこころ分科会は、医学・神経科学に加え、心理学、教育学、法学、倫理学、人権など多様な分野と関わる文理融合的な性格を有している。今後は、この特徴を活かし、脳とこころをめぐる社会的課題について、分野横断的な議論や企画を検討していくことが確認された。

#### 3. 次回開催

次回分科会は、半年後を目途に開催する方向で、日程を調整することとなった。

(文責 古屋敷 智之)